

【翻訳】万徳敬「李白の河東裴氏との交遊について」

内 田 誠 一

Wang Dejing's *A Study of Libai's Relations With the Pei Clan in Hedong* (Translation)

Seichi UCHIDA

要 旨

本稿では、現代中国における中国古典文学研究家で、山西省の運城学院副教授である万徳敬氏の論文「李白与河東裴氏交遊考述」を翻訳した。

これは、李白と河東裴氏一族の人物たちとの交遊について考証した論文である。河東の裴氏は二千年も続いた名門の家系で、宰相や将軍が数多く輩出している。また唐代には、王室と通婚の関係にあった。万氏の論文では、裴氏一族の中から李白と交遊した裴隱・裴旻・裴周南（裴凶南）・裴大沢（裴仲堪）をはじめとする少なからざる人物をとりあげている。

考証にあたっては、先行研究を踏まえつつ、大胆な推断を下している部分がある。一方、特定できない場合は、性急に結論を出しておらず、慎重さも窺われる。なお亀甲パーレン〔 〕内の字句は訳者内田が付加・補足したものである。

キーワード：万徳敬、李白、河東、裴氏、唐詩

『李白集』に見える李白が交遊した人物は、ざっと勘定して凡そ四百人の多きに及んでおり、その中には河東裴氏の人物も少なからず存在する。中国の歴史において、裴氏一族は二千年の長きに亘って連綿と続いた家系であり、とりわけ盛唐時代には夥しい数の将軍・宰相が輩出しており、まことに多士済済の感がある。

さて、先ずここで「河東裴氏」について、範囲を定めて略述してみたい。『裴氏世譜』（山西人民出版社・山西古籍出版社、1995年、10頁）巻一の凡例には「裴氏三眷の子孫、処を各方に散し、尽くは聞喜に居せざるなり。慎は稷山に居し、寂は臨晋に居し、泰は曲沃に居し、休は済陰に居し、良は汾州に居し、順宗は襄陽に居し、懐古は寿春に居するが如きも、史伝には皆な『聞喜の人』と曰ふ」とある。『新唐書』の宰相世系表では、最初に裴氏出身の宰相を並べている。裴氏一族が代々住んできた土地や主要な居住地が河東（今の山西省運城地区）であったので、「河東裴氏」と称せられた。

唐代に至ると、裴氏一族は唐王室の李氏と断ち切ることのできない関係にあった。『新唐書』の諸帝公主伝を調べると、唐一代の間に、高祖・中宗・睿宗・玄宗・肅宗・代宗・憲宗はいずれも皇女を裴氏に降嫁させており、玄宗に至っては三人もの皇女を裴氏に降嫁させている。これらのことから、李白の伝世作品には裴氏一族を賛美する詩文がないものの、李白がこの一族の俊才たちとの交遊を決して軽視していたはずはないと、断ずることができよう。『李白集』には、裴

氏との交遊を詠じた詩歌十四首と文一篇がある。

一、裴隱・裴侍御・裴使君

『李白集』には裴侍御に贈った詩が五首あり、また「夜郎に流されて西塞駅に至り裴隱に寄す」詩一首と裴使君に贈った詩一首がある。瞿蛻園・朱金城『李白集校注』（上海古籍出版社、1980年、1130頁）では、裴侍御に贈った五首に箋注を付けて批評を加えており、この五首の中に詠じられた裴侍御は全て同一人物であり、またそれぞれの創作時期は隔たっていないと指摘している。その中で「裴侍御の岫師を留めて琴を弾じて寄せらるるに酬ゆ」に注釈と批評を加えて次のように言う。

現代の詹鍇は言う、按ずるに「夜 洞庭に泛び裴を尋ねて清酌す」の詩には、「琴を抱いて深竹を出で、我が為に『鶉鴉』を弾ず」とあるので、裴侍御もまた琴に巧みな人物である。詩に言う「琴を鼓して『白雪』を乱し、秋は江上の春に変ず」。恐らく前の〔清酌の〕一首と前後する作品であろう。光緒重修『湖南通志』の流寓人物伝にこうある、「裴隱、官は侍御、岳州に謫居す。岫道人と琴を鼓して自ら娛む。李白 夜郎に流さるるに、之に遇り、相ひ与に唱和遊宴す」と。『李集』を案ずるに「寄裴隱」詩一首有り。又た裴侍御と贈答の詩五首有り。李詩に曰く「已に投沙の伴に先だつ」と。王琦曰く「疑ふらくは亦た当時逐臣たり。故に賈誼投沙の事をを用う」と。「対雨感時」の一篇と合わせて之をみると、王琦の言は信すべきものであると。

また、「鴨欄駅に至り白馬磯に上りて裴侍御に贈る」に箋注と批評を付けて云う。

現代の詹鍇は『湖南通志』に拠って、卷十四に見える裴隱とする。また賈至に「裴九侍御の昌江草堂にて琴を弾ずるに贈る」や「裴九弟に別る」の詩があり、これは裴隱その人である（1276頁）。

裴侍御の名や号は最早調べがつかない。『湖南通志』の流寓人物伝では『旧志』を引いて言う、「隱、字は逸人、臨湘の人」と（卞宝第・李翰章等修、上海古籍出版社、1998年）。臧励和主編『中国人名大辞典』（商務印書館、1921年）には、「裴隱、（唐）臨湘の人、字は逸人。白馬磯に居住し、李白と親しかった。官は侍御、辞して故郷に帰った。琴を弾いて娛しみ、李白もまた宴席で共に唱和したことがあった」とある。裴侍御が裴隱であることは学界の定論のように見える。

『李白集』にはまた「春 商州の裴使君に陪して石娥溪に遊ぶ（時に東帰せんと欲して遂に此の贈有り）」があり、「裴公 仙標有りて、俗を抜くこと数千丈」と詠じている。この裴使君の名は考証できない。廖漢欽「讀杜甫絶筆詩」（『湖南詩詞』1997年第3期）では次のように云う。

裴使君は昌江に草堂を所有していた。李白の詩では何箇所か言及があるが、李白はわざわざ出かけて鴨欄駅に登り白馬磯（今の湘陰県内に在る）に行って裴隱（名は隱、排行は九。白馬磯に居宅があり、また昌江にも草堂があった）を訪ねたのである。賈至が岳州に貶謫されていた時、裴隱と交際があり、賈至の「裴九侍御の昌江草堂にて琴を弾ずるに贈る」詩の描写から考えると、賈至は昌江草堂を訪ねて自ら裴隱の弾琴を聞いたことがあると思われる。李白・賈至・裴隱・杜甫は、いずれも詩人間の友好を結び、知音であった。

廖漢欽がこのように述べていることから、裴使君は裴隱と考えられる。

肅宗の乾元元年（758）、李白は永王李璘に従ったかどで、夜郎に流された。潯陽から出発し、西塞驛（西塞山は武昌県の東に在る）に近づいたその時、李白は裴隱に出会い、「夜郎に流され、西塞驛に至りて裴隱に寄す」を作った。詩中に「鳥去りて天路長く、人愁へて春光短し」とあるので、時は暮春であったと知れる。翌年の乾元二年三月、李白は白帝城に着いて恩赦に遇い、す

ぐに江陵（今の湖北江陵）に引き返した。初夏にまた江夏（今の湖北武漢市）にもどった。夏から秋まで、李白は江夏に留まり続けて帰るのを忘れるほどであった。この時、裴隠はもう彼に先んじて行き、早めに石頭驛に到着した。恐らく同病相憐れむ友人を思い、裴隠は一通の書信を李白に書き、李白と約束して急いで出かけ、約束の日時に駆けつけて共に洞庭湖に舟を浮かべた。そのため、李白は「裴侍御先行して石頭驛に至り、書を以て招かれ、月満ちるを期して洞庭湖に泛ばんとするに答ふ」を作ったのである。詩中に「今来 何の似るところぞ、破鏡 清秋に懸る」とあることから、李白がこの詩を作った時、すでに満月を過ぎていたことがわかる。よって、残念そうに「恨む 三五の明に、平湖 澄流に泛ばざるを」と詠じた。李白は一生、思う存分世俗を軽んじ、義理人情を重んじた。李白と裴隠の交際は格別なものであった。

この年の秋、李白は裴侍御の招きに応じて洞庭湖に遊んだ。そこで二人は詩酒の応酬をし、ただちに「夜 洞庭に泛び裴侍御を尋ねて清酌す」を作ったのである。李白が恩赦に遇った後、〔安史の乱が平らぎ〕天地が新たまったと思い、再び事にあたろうとする意志があった。しかし、宮廷で活躍しようという志を懐いても、その志が実現することはなかった。こんな時には酒を飲まなくては爽快にはなれぬ。だから詩中に「曲尽きて酒亦た傾け、北窓に酔ふこと泥のごとし」と詠じた。人生一人の知己を得れば十分であるが、また刑部侍郎の李暉と中書舎人の賈至が前後して貶謫に遇い、南にやってきたのであった。幾人かとともに洞庭湖に遊び、杯を挙げて風に向かい、筆を下せば玲瓏な詩文ができたのであろう。賈至の「初めて巴陵に至り、李十二白・裴九と共に洞庭湖に泛ぶ三首」では詩中に「江上 相ひ逢うて皆な旧遊し、湘山 永く望みて愁ひに堪へず」「輕舟 落日 興尽きず、三湘五湖 意何ぞ長き」とある。賈・李・裴の三人はいずれも親友で交際が深く、よい友人がいまや裴隠の家に来て、何日も滞在したのであろう。李白が裴侍御に贈った詩はそのほか三首あるが、これまた「舟を洞庭に浮かべた」前後の作であろう。

以上をまとめると、李白の晩年において、裴隠はとても重要な交遊相手であったと思われる。悠久なる中国の歴史において、隠逸の風は、盛んで平和な大唐の世にあっても、かなり流行した。隠逸の動機と方式が遥かに異なっている、殆どの隠逸の士は、心の中に美徳を懐いていたのである。「隠」が「裴隠」の身分であろうと、やはり彼の名であり、我々はみな彼の隠逸の情を窺うことができよう。李白と裴隠の交遊は、我々が李白の精神世界を研究するための一つの道筋なのである。

二、裴 旻

『新唐書』（中華書局2003年版、5764頁）李白伝の後に裴旻を附して、次のようにある。

旻 嘗て幽州都督の孫佺と北伐し、奚の囲む所と為る。旻 舞刀して馬上に立つ。矢 四集するも、皆な刀を迎えて断ち、奚 大いに驚き、引いて去る。後 龍華軍使を以て北平を守る。北平 虎多く、旻 射を善くし、一日 虎三十一を得たり。山下に休むに、老父有りて曰く、「此は彪なり。稍や北に真虎有り。もし將軍 之に遇はば、且に敗れんとす」と。旻 信ぜず、馬を怒らせて之に趣く。虎有りて叢薄の中より出づ。小なれども猛なり。地に据りて大いに吼ゆ。旻の馬 辟易し、弓矢皆な墮つ。是より復た射せず。

『裴氏世譜』卷十二に「旻 劍を善くし、玄宗 花萼楼に置酒し、旻に詔して劍舞せしむるに、喬潭賦する有り」とある。『裴氏世譜』卷十二ではまた『酉陽雜俎』を引いて、「裴旻 山行するに、山蜘蛛の糸を垂ること匹布のごとし。將に旻に及ばんとするに、旻 弓を引きて之を射殺す。大なること車輪のごとく、その糸を断つこと数尺、之を部下に収めしむ。金瘡有る者、方寸

を剪りて之に貼らば即ち癒ゆ」とある。

『新唐書』宰相世系表に「旻，左金吾大將軍」「裴晟，和州刺史。裴晞，尚方監」とある（2184頁）。『裴氏世譜』第一を見ると、裴旻は、裴氏第三十一世の孫である。裴旻は刀を横に抱えて馬に騎ることができるだけでなく、剣舞が上手であった。剣が彼の手中にあると、それは一つの武器にとどまらなかったのである。盛唐時代、裴旻とその手中にある剣は、とりもなおさず「剣舞」という一つの芸能の様式の代名詞であった。当時においては、たとえば顔真卿や王維らの作品には、いずれも裴旻の剣術と武略を称賛する贈答詩がある。裴敬「翰林學士李公墓碑」（王琦『李太白全集』中華書局1977年版、1470頁）によると、「太和の初め、文宗皇帝は翰林學士に命じて三絶賛を為らしむ。李公の詩歌と裴旻將軍の剣舞、洎び張旭長史の草書、『三絶』為り」とある。裴旻は裴敬の曾祖父の弟であるので、裴碑の史料価値は高い。宋初の『太平広記』（中華書局1994年版、1623頁）にもこうある。

開元中、將軍裴旻 母の喪に居るに、（呉）道子に詣り、東都天宮寺に於いて神鬼數壁を描くを請ひて、以て冥助に資せんとす。道子答へて曰く、「画を廢すること已に久し。若し將軍 意あらば、吾の為に纏結して一曲を剣舞されよ。庶はくは猛勵に困りて幽冥に通ずるを獲ん」と。旻 是に於て縷服を脱ぎ去り、常時のごとく裝飾し、馬を走らせて飛ぶがごとく、左旋右抽、剣を擲ちて雲に入る事高さ數十丈。電光の下射するがごとし。旻 手を引きて鞘を執りて之を承け、剣 室を透りて入る。觀る者千百人、驚慄せざるは無し。道子 是に於いて毫を援りて壁に図けば、颯然として風起り、天下の壯觀たり。道子平生画く所、意を得たるは此に出づるは無し。

これは中国の藝術史上の趣きに富むエピソードであるが、また深く考えさせられる内容である。裴旻の剣術は安心して絶妙の境地に至り、呉道子の絵画はその技量の精工なること天然を超越している。李白の詩歌は大いに開いたり閉じたりし、大いに昇ったり下ったりしている。これは彼らの芸術において互に通じているものがあり、いずれも天神が身を躍らせ、際立って秀れているようなものである。

歴史上の多くの文人たちのように、李白は剣に対しても強烈な意欲を持っていた。「亂離を経て後に、天恩 夜郎に流さる。旧遊を憶ひて懷を書し、江夏韋太守良宰に贈る」に云う、「剣を學びて翻つて自ら晒ひ、文を為りて竟に何をか成す。剣は万人の敵に非ず、文は四海の声を窃む」と。

李白の詩文の中で、自らが剣を學び、剣を佩び、剣を用いることに言及している作品は少なくない。開元十八年（730）初夏、李白は初めて長安に上った。この詩人は「千鈞の弩、一たび発して中らずんば則ち、当に槿を摧き牙を折りて永く機用を息む」（范伝正『唐左拾遺翰林學士李公新墓碑』）のであった。「物 その平を得ずんば鳴る」〔韓愈「孟東野を送るの序」〕のであって、我々はこの時の李白の血の中に、任侠精神が澎湃と湧きあがっていたことを想像できよう。そこで開元二十八年五月、李白は家を東魯（今の山東省兗州市）に移し、任城（今の山東省濟寧市）に寓居した。「五月東魯の行、汶上の翁に答ふ」詩に云う。「顧みるに余は仕ふるに及ばず、剣を學ぶに山東に来る」。だが「十五にして剣を學」び、二十數歳で「劍に仗りて国を去り、親を辭して遠遊」〔（安州の裴長史に上るの書）〕した李白は、どういうわけで山東に剣を學びにきたのであろうか。一つの合理的解釈は、山東には剣術の名人である裴旻がいたからではないかということである。

名声が天下に鳴り響いていた裴旻は、当時も山東に寓居していた。また、昔から李白も敬服していたのであった。李白は裴旻の教授を得ようと裴旻に書信を認めて、「白のごときは、將軍の

門下より出でんことを願ふ」〔(裴敬「翰林学士李白墓碑」)〕と言う。裴碑では、「開元中、駕して東洛に幸し、呉生は裴旻・張旭と相ひ遇ひて、各おの其の能を陳べたり。裴旻は一曲を劍舞し、張は一壁に書し、呉は一壁に画く。都邑の人士、一日の中に三絶を睹るを獲たり」とある。この資料は、張旭と裴旻は開元年間に交遊があったことを我々に伝えている。また張旭と李白は、ともに飲中八仙の一人である。劍と書と詩は遠く隔たって関係がないものようだが、裴旻・張旭・李白の三人の間においては、芸術上での啓発と融和や理解が現実的に行われていたのであろう。

三、裴周南・裴図南

『李白集』の中に「裴十八図南の嵩山に帰るを送る二首」があり、また范碑に「時人又た公及び賀監・汝陽王・崔宗之・裴周南ら八人を以て『酒中八仙』と為す」とある。だが、裴図南と裴周南とが同一人物であるか否かに至っては、これまでさかんに論争が行われてきた。或る人は裴図南と裴周南は同一人物とすべきであり、二つの名のどちらか一つは誤りであると考えている。また或る人は、この二人の人物を一緒くたにすることは出来ないと考えている。さらに或る人は折衷して、裴周南は、裴図南の誤りであるか、その兄弟ではないかとする。

王琦「李太白年譜」では、「天宝二年、癸未。四十三歳。公は長安に在りて、賀知章・汝陽王璣・崔宗之・裴周南と酒中八仙の遊を為す」(1587頁)とある。王琦のこの考証はとても詳しい。初めに裴周南を「八仙」の一人に入れたのは范碑である。だが李陽冰「草堂集序」や『新唐書』李白伝や杜甫の詩歌にはいずれも見えない。よって王琦は次のように推測している。

其れ裴周南一人、杜詩詠ずる所の数に入らず。今時の文酒の会のごときは、之を行なふこと日久しく、一人或いは亡せば則ち一人を以て之を補ふ。以て姓名流伝を致し、參差として一ならず。其れ此を以てなるか。

郭沫若もまた、王琦のこのような観点到賛同しており、蘇晋の死後、その欠を補うために裴周南が「八仙」のグループに入れられているとする(『李白与杜甫』人民文学出版社、1972年、70頁)。初期の文献では范伝正ただ一人が、「八仙」には裴周南が入るべきであると考えていたにも拘わらず、范と李は時代が離れてはおらず、また范氏と李氏の両家には「通家の旧(一家のように親密に交際するなじみ)」(范碑)があったので、多数の研究者が裴周南を補い入れられた人物と考えたのであるが、裴周南を除外する人も僅かにいたのであった。李白と裴周南にはこのような交遊経歴がある以上は、裴図南と裴周南は同一人物に違いなく、二つの名のどちらかひとつに誤りがあると推断する人がいるわけである。このような結論には検討の余地がある。

胥樹人『李白和他的詩歌』(上海古籍出版社、1984年、150頁)に云う、「范伝正『新墓碑』に列している『飲中八仙』の中に裴周南がいるが、裴図南の誤りか或いはその兄弟かもしれない」と。『裴氏世譜』を見ると、裴脩然は思訓の子で裴氏第31世の孫である。脩然のその下には四人の子息、裴周南・裴邵南・裴国南・裴士南がいる。兄弟四人は『新唐書』宰相世系表にいずれも記載がある。また『全唐詩』(中華書局、1983年、9637頁)を見ると、裴脩然「夜酔ひて街に臥す(開元中、夜酔ひて街に臥し禁を犯す。乃ち此の詩を為る)」詩一首があり、次のように紹介している。「裴脩然、楚州刺史思訓の子なり。開元中、道士と為る。詩酒を好み、丹青を善くす」。「脩」と「脩」は音も意も異なるが、字形が非常に似ており、その上あらゆる文献の中で、脩然や脩然は裴思訓の子といわれているので、「裴脩然」と「裴脩然」は同一人物に違いないのではないかと疑われている。

周知のように、中国の古人の名や字には内包されたものが豊かにあり、その中には中国伝統文化が反映した父母の期待と個人の理想が含まれている。子息の為に脩然(或いは脩然)と名付けるあたっては、必ずや研究したに違いない。このことから大胆に推測すると、子息の為に「周南」「邵南」と選名したのは、『詩経』十五国風の中の「周南」「邵南」からもってきたのであろうし、「国南」「士南」はおそらくは『左伝』〔成公十六年〕の「国士在りて且つ厚し。当るべからざるなり」の寓意であろう。「凶南」は『莊子』逍遙遊篇の「背に青天を負ひて、之を天闕する者莫し。而る後 乃今 将に南を図らんとす」に基づくのであろう。後の時代の人々はここから名づけて、その大いに志すところの意を取ったのである。よって我々は、裴周南と裴凶南は二人であり、混同できない、と疑いなく言える。(関連する論考に、郁賢皓『李白叢考』(陝西人民出版社、1983年)に収める「李白交遊雜考」、135～137頁がある。)

「裴十八凶南の高山に帰るを送る」には「当に馬に上るべき時に臨んで、我独り君と言ふ。……同に帰るに早晚無く、潁水に清源有り」とある。この詩から、裴・李両人の親密で隔たりがないのは共同の志向に基づいているのだとわかる。友人もまた生命の一部分なのだ。

四、裴十四・裴十三

『李白集』に「裴十四に贈る」詩一首があるが、『李太白全集』『李白集校注』を見ると、いずれも「裴十四」その人については注が無い。「裴十四に贈る」は開元十八年(730)李白がはじめて長安に入った後に書かれたものである。張悦・張洎父子に謁見していずれも冷遇され、さらに玉真公主および何人かの王公大臣に謁見しようとして実現しなかった。そこでその年の暮秋に、西のかた邠州(今の陝西省彬県)に出かけた。この詩はすなわち邠州に出かける以前に書かれたものである(安旗・薛天緯『李白年譜』, 齊魯書社, 1982年, 40～44頁)。

葛景春氏は「裴十四、名と字は不詳。詩意から考えると、裴政に違いない。裴政は李白の親友で、『竹溪の六逸』の一人である」と考えている(『李白詩選』中華書局, 2005年, 338頁)。

安旗氏は次のように考えている。「裴十四、その人の名や字は不詳。詩が「裴令公」をもって之に例えているからには、李白が広く拝謁していた中央朝廷の高級官僚に違いない。当時の宰相の中に裴光庭がいる。光庭は開元十七年に中書侍郎・同中書門下平章事となったことが『旧唐書』の本伝に見える。題中の裴十四は裴光庭であるかもしれない」(安旗『李白研究』, 西北大学出版社, 1987年, 44～45頁)。

楊西江は「裴迪は詩才に溢れているが、早年にはまだ榮進していなかった。高適の『裴秀才に酬ゆ』では『男兒 意を得ること貴し……未だ衆人に道はず』と詠じている。李白『裴十四に贈る』には『朝に見る裴叔則……飄として浮雲の且に西に去らんとするがごとし』とある。これらの詩歌は、当時の裴迪が懷才不遇であったという真実をとらえた描写に他ならない」(西江・楊鑾清『裴氏春秋』山西古籍出版社, 2006年, 358頁)。

以上のことをまとめると、裴十四のことを、葛景春は裴政と考え、安旗は裴光庭と考え、楊西江は裴迪と考えている。三者の見解は全て憶測に過ぎないので、筆者は、判断を保留にしておくのが妥当だと考える。裴迪は盛唐時代の優秀な人材であり、杜甫・王維・高適らには何れも彼との交遊を詠じた作品が世に伝わっている。『新唐書』宰相世系表には裴迪の名が見えるが、これ以外に如何なる文字資料も無い。その兄弟に裴通(同州刺史)・裴造・裴達がいる。『裴氏世譜』卷一を見ると、裴迪は裴氏第31世の孫である。『世譜』名人贈答詩に、杜甫「裴十四迪の新津山寺にて王侍郎に寄すに和し奉る」が見えるが、清代の曹寅・彭定求『全唐詩』・仇兆鰲『杜詩詳

注・楊倫『杜詩鏡詮』では、「裴迪」の二字の間に「十四」の文字がいずれも無いので、『世譜』〔が裴十四迪に作っていること〕は信ずるに足りない〔訳者内田按ずるに、『文苑英華』巻234にこの詩が掲載されているが、「裴十四迪」に作っているので、排行の「十四」には何らかの根拠があるものと思われる〕。古人が交遊の過程において、いつも相手のことをその家族の中での排行で呼んでその名や字を書かないのは当時の習慣である。だが、それが却って後代の人間が人物考証を行なうのに大いなる困難を齎しているわけである。

李白集の中にはまた、「于十一兄述・裴十三に留別し塞垣に遊ぶ」という作品がある。詩中に「裴生 千古を覽、龍鸞 文章炳たり。悲吟すれば雨雪 林木を動もし、書を放ち劍を輟めて 高堂を思ふ」とある。裴十三の名や号もまた調べがつかない。彼は裴十四とどのような関係にあるのだろうか。胥樹人は次のように考えている。「(李白)が結婚した翌年(751年・天宝十載)、…彼は河北の邯鄲一帯に漫遊に行くことを選択し、軍隊に参加しようと思った。遊歴前に『于十一兄述・裴十三に留別し塞垣に遊ぶ』詩がある。李白集の中の『裴十四に贈る』の詩を按ずるに、名は詳らかではない。また『早秋 裴十七仲堪に贈る』『裴十八因南の嵩山に帰るを送る二首』の詩がある。この裴十三はおそらく彼らと同族であろう」(『李白和他の詩歌』139頁)。李白が書いた裴十三・裴十四の両名は、当然極めて近い血縁関係にあったと考えられよう。

五、裴大沢・裴仲堪

李白には「杭州にて裴大沢の時に盧州長史に赴くを送る」があり、また「早秋 裴十七仲堪に贈る」がある。裴仲堪はどこの人であろうか。ここで大胆に仮定したい。裴仲堪こそは裴大沢であると。裴大沢と裴仲堪は兩唐書には伝が無い。だが、彼らの名や字は、いささか価値のある情報を伝えている。大沢は『左伝』襄公の二十一年に「深山大沢、実に龍蛇を生ず」とあるのを典故としていよう。深山大沢は大いなる氣象、大いなる胸襟、大いなる什器の象徴であり、杜甫の「孔巢父の病に謝して江東に帰遊するを送り、兼ねて李白に呈す」に「深山大沢 龍蛇遠し」とある。李白の「早秋 裴十七仲堪に贈る」に「裴生信に英邁、屈起 才能多し。……窮溟 寶貝を出し、大沢 龍蛇饒かなり」とある。当該詩の中にある「大沢」の文字は、表面上は『左伝』中の典故を用いたのであるが、その実、裴仲堪の名(或いは字)の芸術的な効果を暗示しており、吟味する価値がある。

仲堪は、古代より伝わる高辛氏の八人の才徳のある人の中の一人である。『左伝』の文公の十八年に「高辛氏に才子八人有り。伯奮・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季狸は忠肅共懿・宣慈恵和にして、天下の民は之を八元と謂へり」とある。後にこの名を用いて才徳ある人を誉めたたえた。仲堪にはまた、その他の含意が無いだろうか。我が国の歴史上に殷仲堪がおり、「殷仲堪字淵源考(殷仲堪が淵源を字としたことについての考察)」という文章をネットのブログに書いた人がいるが、この文章は、我々に些かの啓示を与え得るかもしれない。そこには、「晋人 殷仲堪、其の字は諸書いずれも載せていない。本文の目的は殷仲堪が淵源を字とした可能性を考察することにある。…まず「堪」は『集韻』に拠れば、楚錦の切、「不清澄」の義。殷仲堪が淵源を字としたのは、名と字が互いに関係していて適切である」〔(水鏡的博客・http://blog.sina.com.cn/s/blog_4c4be0f4010007xl.html)〕とある。『集韻』を見るに、堪は險岸(けわしいがけ)の意。このように(仲)堪と大沢の間には内在的で有機的な関係が形成されている。古人の名と字との間には、ほかでもない相同・相関或いは相反といったいくつかの関係があるのだ。よって我々は大胆に推断できよう、裴大沢は裴仲堪であると。

六、その他の裴氏一族の人物

『李白集』には、他にも裴長史・裴司馬・裴政・裴使君といった裴氏一族の人物が見える。開元十八年(730)春、李白は安陸で「安州の裴長史に上るの書」をものした。王琦は『容齋四筆』[卷三「李太白怖州左」]から次のように引用している。

裴君は何如なる人なるかを知らざるなり。その貴にして且つ賢なるを誉むるに至りては、名は天京に飛び、天才超然、作者を度越し、陵威雄雄として下は群物を懼やかす。予謂へらく白は白き衣を以て翰林に入り、その蓋世の英姿、能く高力士をして韉を殿上に脱がしむるは、豈に拘拘然として一州の佐を怖れしむる者なるか。蓋し時に屈伸有りて、当に自から爾くせざるを得ざるべし。大賢不偶にして、神龍 螻蟻に困ずるは嘆ずるに勝ふべけんや。(『李太白全集』1251頁)

この部分では李白の風采を顕彰するために、裴君の社会的地位と影響を弱めている。李白は裴氏に書いた信書の中でははっきりと言っているように、当時の裴長史は「名は天京に飛び、四方の諸侯、風を聞きて暗に許す」という人物であったと言わねばならない。これは誇張した部分もあるだろうが、国境を守る將軍であった蘇頌に才能を買われ、宗教界の領袖であった司馬承禎に引き立てられた李白であるから、彼が交遊・謁見する場合は、必ずや人物を選んでいたはずである。「安州の裴長史に上るの書」によれば、裴の身分・立居振舞・気概・為人はいずれも非凡であり、「白 窃かに高義を慕ひ、已に十年を経たり」とある。この記述は、この書信を書く十年前(時に李白は蜀に在ったと思われる)に、すでに裴の高名を承知していたことを物語っている。しかし、「雲山 之を聞て、造謁するに路無し」であった。裴が安州刺史に任ぜられるに至って、李白は初めて謁見することができたのである。「顔を承け辞を接へること八九度なり」とあり、李白は何度も裴長史に拝謁していたことがわかる。裴長史と李白の交際は愉快なものであったろう。しかし、良い事は長く続かなかつた。「讒言忽ち生じ、衆口 攢まり毀す」ということになった。これによって裴長史は故意に彼を遠ざけた。そのため彼は、やっとこの書信を書いて自ら釈明したが、遂には裴長史に拒絶されてしまったのである。李白はもともと拝謁を通じて栄達したいと考えていたのだが、不幸にも裴長史のところで、「交りを存つに義を重んじ、高を養ひて機を忘る」といった李白はまた挫折したのであった。しかし、長々とした不遇な道のりが、それからも彼の行く手に待っていたのである。

また、「裴司馬に贈る」という詩がある。王琦は云う。「司馬。『唐書』百官志を按ずるに、刺史の僚佐に、司馬一人有り。位は別駕・長史の下に在り。上州なる者は従五品下、中州なる者は正六品下、下州なる者は従六品上なり」と(529頁)。隋唐両代には、州・郡・府の佐吏には司馬が一人おり、位は別駕や長史の下である。一般に罷免を掌る官として用いられるが、ただ虚名があるだけで実権がなく、事実上の閑職である。「司馬」の官階は高くなく、李詩の中のこの「裴司馬」もまた志を得た人物ではない。それでは、彼の過去はどうなのか。「若し雲間の月無くんば、誰か光輝に比すべき」とあることから、裴司馬は輝かしい過去があったと知れる。しかし、「秀色 一に此の如く、多く衆女に譏らる。君恩 昔愛を移し、寵を失ひて秋風に帰る」とあって、結局は「閑職」に終わったのである。

また「韓準・裴政・孔巢父の山に還るを送る」がある。開元二十八年(740)五月、李白は家を東魯に移して任城に寓居した。安旗『李白年譜』は、該詩は李白が任城に寓居している時に書かれたとする。『新唐書』李白伝に「(李白は)更に任城に客たり。孔巢父・韓準・裴政・張叔明・

陶沔と徂徠山に居し、日び沈飲し、「竹溪六逸」と号す」とある。李白は「裴子 清真を含む」と誉めており、裴政その人の品格を類推できよう。『世譜』裴氏世系表に「裴政」が二人見える。一人は李白誕生以前の、もう一人は李白没後の人物で、いずれもこの裴政とは無関係である。

また、「王十二の寒夜独り酌みて懐ふ有るに答ふ」に、「君見ずや 李北海、英風豪気 今何くにか在る。君見ずや 裴尚書、土墳三尺 蒿棘の居」とある。李白に「李邕に上る」詩が有り、李邕と交遊があったことがわかる。この詩はまた、李邕（北海）と裴尚書を同列に論じているので、李白とこの裴尚書が交遊した可能性も極めて高い。それでは、この裴尚書はいかなる人物なのであろうか。王琦注では、江隣几の「雑誌」を引いて、唐の玄宗朝における六人の裴尚書の中の裴敦復である可能性が最も高いと考えている（915頁）。葛景春氏も同じような見解を持っている（葛景春『李白詩選』、中華書局、2005年、177頁）。裴敦復は裴氏第33代の孫であり、『新唐書』裴寛伝の中に記載があるが、それは裴敦復のマイナス面を物語る資料である。

李白と河東裴氏一族との交際は、李白の一生の交遊における大事件であった。ただ文献が欠如しており、李白と交遊した裴氏の人物の名・号や動静、そして創作などの奥深い部分は知ることができない。だが、この問題はさらに探究するに値するものであり、ここに提起して後の考察に備えたい。いずれにせよ、河東裴氏との交遊は、李白の心身と創作に対して軽視できない影響を齎したのである。

■ 翻 訳 後 記

本稿では、万徳敬氏の論文「李白与河東裴氏交遊考述」を翻訳した。

この論文の初出は『中国李白研究 2008年集』（黄山書社、2008年）。本稿が翻訳に用いたのは、万氏の著書『振葉尋根—河東人物叢考』（全239ページ、中央編訳出版社、2012年）に収載された上記の論文を補訂した同名の論文である。なお、この『振葉尋根—河東人物叢考』は、柳宗元・呂洞賓・関羽・李白・王含光・裴鏡民の六人の河東人物についてそれぞれ詳細な考証を行った論文をまとめたものである。

ここで、万氏の略歴について紹介したい。氏は1967年生、河北青県の人。現在、运城学院中文系副教授。滄州師範專科学校卒業後、13年間、高校教師として教育に従事するも、研究の志やみがたく、2002年より河北大学大学院修士課程に学び、2005年、文学修士の学位を取得し、运城学院の教員となった。2010年、西北大学大学院博士課程に入学し、李浩教授に師事。その間、2012年2月～7月、香港城市大学に訪問博士として滞在した。2013年、博士論文「明清の唐詩詩意画の文献輯考と研究」で博士学位を取得。昨年2014年9月～12月、台湾大学に訪問学者として滞するなど、大いに活躍している。著書は、前掲の『振葉尋根』の他に『袁凱集編年校注』（上海古籍出版社、2015年）などがある。

訳者は安田女子大学の長期海外研修員に選ばれ、2014年4月から9月までの半年間、中国山西省運城市にある运城学院（Yuncheng University）において訪問学者（visiting scholar）という立場で研究に従事した。その際、运城学院の万徳敬博士から懇篤なる教示を受けることができた。改めてここで深く鳴謝申し上げたい。

[2015. 6. 25 受理]